ふんわりドルチェ

海夜 音琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふんわりドルチェ

【Ｎコード】
Ｎ９０５９Ｘ

【作者名】
海夜　音琴

【あらすじ】
植物と会話が出来る少年、ニフェル。その能力を活かし調合師となった彼は、幼い頃に幼馴染みとある約束をしていた。
『大きくなったら、絶対会いに行くよ』。八年前のシフォンケーキの味を頼りに、ニフェルは引っ越した幼馴染みを探し旅を始める――。
旅を始めて三月目、ニフェルはイシャンという大きな街に行く。そこでニフェルは、男の子みたいな少女ナワと、幼馴染みの作るシフォンと似ているシフォンケーキに出会う。このシフォンは誰が作

ったのか。そしてナワの「あたしは自分を忘れたんだ」という言葉はどういう意味なのか……。

シフォンケーキで紡がれるほのぼの恋愛ストーリー、ここに開幕！

1日目―？

草原に横たわる一人の少年。
さわさわと草が揺れる暖かな気候の中、少年は植物達との会話を楽しんでいた。

『ニフェルー！』

たたっと駆け寄ってくる少女。その手には、白い箱がある。
少年はよいしょと上体を起こした。そして、少女に向かって軽く手を挙げる。

『よう』

『これねー、あたしが初めて自分で作ったんだよ！』

少女が差し出す白い箱を、少年は首を傾けながら受け取り、開けた。

『シフォンケーキ？』

中には真ん中に穴の空いた、直径三十センチ程のシフォンケーキが入っている。程よく焼き上げられた色に、甘い匂い。
見るからに、美味しそうだ。

『うん！　でもただのシフォンじゃなくてねー、それオレンジシフォンなの！』

『……オレンジ？』

少年は何故か、眉を寄せた。しかし少女はそれに気付かず、得意気に話す。

『うん。オレンジジュースを入れてみたの』

『僕、甘い物に柑橘類が入ってるのはちょっと……』

少年は、洋菓子に柑橘が使われているのを好まない。それを、この少女も知っているはずだ。

これは嫌がらせだろうか、と真面目に考え出した少年に、少女は口を尖らす。

『そんなの知ってるもん！　いいから、食べてみてよ！　オレンジの味は全然しないから！』

『オレンジ味のしないオレンジシフォンって、それただのシフォンケーキじゃないか』

思ったことを素直に口にすると、少女は頬っぺたをハムスターのように膨らませた。

『もー、あー言えばこう言う！　いいから、とりあえず食べてよ！』

少女は箱に入った柔らかなシフォンケーキを手で鷲掴みにすると、少年の前に差し出す。

（自分で作ったケーキを、乱暴に扱うのってどうなんだろう）

少年は少女の手によって変形しているシフォンケーキを見て思っ

たが、それを口にすると少女がもっと怒ってしまうので、自らの胸に留めておいた。

『食べるから落ち着けよ』

いいから食え、と少女はシフォンケーキを少年に押し付ける。
少年は強引な少女に苦笑しつつ、シフォンケーキを千切って口に運んだ。

『……美味い』

ほんのりと甘く、ふんわりとした感触が美味しい。少女の言う通り、オレンジの味もしなかった。

『美味いよ！』

『良かったー！　オレンジは大丈夫？』

『うん。君の言った通り、全然味しない』

二口目を頬張ると、少女は得意気に胸を張る。

『ココアとか抹茶のシフォンでも良かったんだけどね、オレンジジュースをちょっと入れのが一番ふわふわになるからオレンジシフォンにしたんだ！』

『へー。本当美味いよ』

三口目を口に入れる。

『ありがとう。この村を去る前に、ニフェルに食べて欲しかったんだ。あたしのシフォン』

『……この村を去る？』

四口目を千切った手が、ピタリと止まる。

そんな話し、幼馴染みである少年は聞いていない。

『うん、今日の夕方に。だからこのシフォンは、ニフェルへの餞別なんだよ？』

『夕方って、もうすぐじゃないか！　僕はそんな話し、聞いていない！』

少年が立ち上がると、少女は彼に無表情な顔を向ける。

『だって、言ってないから』

『言ってないって、どうして――』

言ってくれないんだ。

そう続けたかった言葉は、少女の叫びにも似た声で遮られる。

『どうしてって、言ったら哀しくなるモン！　あたし、ニフェルと離れたくない。この村を出たくない！』

先程の無表情は、どうやら作り物だったらしい。今の少女は、ダムが決壊したかのように大粒の涙を流している。

『あた、っし！　ニフェルがっ……好き！　離れたくないよぅッ！』

止め処なく溢れる涙と共に、少女は少年に対する想いを吐き出した。

『……』

顔をくしゃくしゃにしながら涙を流す少女を、少年はぎゅっと抱きしめる。

『僕も、君が好きだよ。だから、泣かないで』

体を離し、少女の涙をそっと拭って、少年はニコッと笑みを浮かべた。

『大きくなったら、どこにいよう探しだして会いに行くよ。将来、おじさんみたいなパティシエになるんだろ？』

こくんと、少女は頷く。

少女のお父さんは有名なパティシエで、遠くの街から買いに来る客も後を絶たない。

『だったら、僕はシフォンの美味しいパティシエを探すよ。それが君だって、信じてる』

『……本当に、探してくれる？』

潤んだ瞳で、少年を上目遣いで見る。少年はまたニッコリと笑った。

『絶対探すよ。きっと会いに行くから、待っててて』

『……待ってる』

少女は少年の胸に、コツンと額をぶつける。
そんな二人を見守るように、草木がさわりと揺れた。

1日目―II

泣き暮れ丘と呼ばれる小高い丘の頂に、一本の大木が立っている。その木は青々と葉が茂り、幹は成人男性が腕を回しても届かないくらい、太い。

そんな木の根元に、一人の男がいた。

青年と呼ぶには少し幼く、少年と呼ぶには少し大人びた、そんな男。男は慈しむように、ゴツゴツとした焦げ茶の幹に触れ、そして問う。

「何かしてもらいたいことは、ない？」

『大丈夫だよ。此月は雨がよう降ったからのぅ。しかしニフェルには、いつも世話になるわぃ』

その声は、男――ニフェルの心に直に響いてくる。

ニフェルは嬉しそうに笑い、優しく幹を撫ぜ始めた。

「そうやって言ってもらえると嬉しいよ。でも、一月に一回しか来れなくて、ごめんな？」

『よいよい。一月に一回来てもらえるだけで、わしは万々歳じゃ』

傍目から見れば、それは木がざわざわと揺れ、ニフェルが一人で話しているように見える。

しかしニフェルは、一人で話しているのではない。この木と、会話しているのだ。

ニフェルには、幼少の頃から植物と会話を出来る能力が宿っている。三月前に十八になった彼はその能力を生かし、薬草を使って薬

を煎じる調合師の職に就いた。

「でも、前は毎日来てたのに」

『為すべきことがあって、お主は旅をしている。それを悔いるではない』

十八となった三月前、ニフェルは故郷の村を出て旅を始めた。
その目的は、貴重な薬草を収集することと、行けば一月は滞在する街で薬の調合をすること。
しかしその二つの目的は、ニフェルにとっては後付けでしかない。彼はもっと大きなことを為すべく、旅をしている。

『してニフェル、見付かったのか？』

木の問いかけに、ニフェルはふるふると首を振った。

「見付けてたら、一緒に来てる」

『それもそうじゃなぁ。だがニフェルよ、八年も前の口約束を、お主はよう守ろうとするのぅ』

そう、口約束。ニフェルが為そうとしていることは、八年前に、とある少女と交わした口約束だ。
守らなければいけない、という決まりはない。だが、それでも、とニフェルは言う。

「僕とあいつを繋げる、唯一のものだから」

――大きくなったら、どこにいようと探しだして会いに行くよ。

――……待ってる。
その再会の口約束をした光景を、今でも鮮明に脳裏に浮かべることが出来る。
引っ越すこととなった幼馴染みと交わした、再会の約束。
もしかしたら向こうは、覚えてないかもしれない。
もしかしたら向こうは、本気にしたのかと嘲笑うかもしれない。
彼女はそんな娘ではないと知っているが、万に一つでもその可能性は考えられる。
それでも、とニフェルは思う。

「僕はずっとあいつが好きだった。なのに、あいつに先に言われちゃって、男として悔しかったんだ。だから、今度は僕から言う。この腕にあいつを、もう一度抱き締めたい」

ニフェルは八年間ずっと、少女を思い続けている。彼女以外を好きになったことは、一度もない。

「今も好き。僕は、あいつが好きなんだ」

そう強く言うと、木はさわさわと笑った。

『そのくらい強い思いなら、いつかは会えるじゃろう。その気持ちを大切にな、ニフェル』

「うん」

木が笑っているから、ニフェルも眼鏡の奥の瞳を細め微笑みを浮かべる。

『さて、そろそろ行く時間かのぅ。次はどこへ行くんじゃ？』

「そこの街。ほら、ここから見えるすぐそこの」

『ほう、“イシャンの街”か。あそこは大きい街じゃから、もしかしたら探し人もいるかものぅ』

丘を下り、少し歩けば辿り着けそうな大きな街。イシャンと、いうようだ。

「じゃあ、行くよ。また一月後に来るね」

『気を付けてな、ニフェル。一月後に、お主が探し人を連れてここに来るのを待っている』

ニフェルは木に頷きかけると、ゆっくりと丘を下る。大きな街、イシャンに向かって、その歩を進め始めた。

大木の言う通り、イシャンは大きな街だった。道路には沢山の車が走り、石畳の道は小さな子供から奇抜なファッションをした老人まで、多種多様な人が歩いている。

人の多さに圧倒されたニフェルが人の少なそうな方へと歩み出してから、凡そ四十分。辿り着いたところは彼の望み通り、人の少ないストリートだった。ニフェルが最初にいた場所は、どうやら街の中でも発展したところだったらしい。

（人減って良かったー）

人混みが嫌いなニフェルはほっと安堵の息を吐くと、曲がり角を右に折れた。
刹那、ドン、と。体の右側に吹っ飛びはしないがよろめく程の衝撃が走った。

「わっ……」

「うわぁ！」

ニフェルの反射で出た声は小さく、もう一つの声に掻き消される。
自分以外の声が聞こえたことに驚き、声の飛んできた方を見ると、一人の少年が転がっていた。彼が持っていたのか、数冊の本と何枚かの紙が辺りに散らばっている。
転がった少年と散らばった彼の所有物。それを見て、さっきの衝撃はこの少年とぶつかったからなのだと分かった。

「ってーなー！　ボサッとしてんなよ！」

少年はさっと起き上がり、珍しい桜色の双眸でニフェルを睨め上げる。胡桃色の髪に、怒りで吊り上がった桜色の瞳。黒い膝丈のズボンに上は紺色の薄手のセーター、足にはキャラメル色のブーツを履いている。
随分口の悪い少年だと思いつつ、状況を把握したニフェルはどちらに非があるのかは分からないが、とりあえず謝罪を述べた。

「ごめんなー、怪我ない？」

「ねーよ、んなもん！　それよか、あたしの荷物拾うの手伝えよなー」

「……あたし？」

少年の一人称にしては、相応しくない。ニフェルはその単語を思わず口でなぞった。

散らばった紙を拾っていた一人称あたしの少年は、再び吊り上がった桜色の瞳を向けてくる。

「あたし、で悪ぃかよ？　……あっ、まさかお前！」

彼はすっと立ち上がった。先程立った時には分からなかったが、少年の身長はニフェルの肩にも満たない。その低い位置から、少年はニフェルの目をじっと見つめる。

「あたしのこと、男だと思ってんじゃねーだろーなぁ？」

「えっ、女……の子？」

「そうだよっ、あたしは女だ！」

ぷくっと頬を膨らませ上目遣いでこちらを睨む顔は、よく見れば確かに女の子だった。

「わっ、悪ぃ！　格好とか、口調でつい……」

慌てて謝ると、少年もとい少女は、ぷいっと顔を背ける。

「……別にいーよ。間違えられるのは慣れてっし」

それよりも拾うの手伝え、と少女はもう一度言い、自らも拾い始めた。

ぶつかってしまったことと男だと勘違いしてしまったことの罪悪感――ほとんどは後者の罪悪感――から、ニフェルも慌てて本と紙を拾う。
ニフェルが二冊の本と五枚の紙を拾ったところで、地面に散らばったものは無くなった。

「本当、色々ごめんな？」

拾ったものを手渡しつつ、ニフェルは再度謝罪を口にする。

「もういいって、別に。気にしてねーから」

「ならいいんだけど……。あ、ずっと気になってたんだけどさ」

「……何？」

「目、変わってるよなー。桜色の瞳なんて初めて見た」

彼女の瞳に一番近い色彩、桜色。桜という花の色で、それは桃色よりも薄い淡紅色だ。
少女の顔が、ぱっと輝いた。

「あんたもしかして、植物に詳しいのか！？」

「ま……まぁ。一応調合師やってるから、普通の人よりかは詳しいと思うけど……？」

「わー、やっぱり！」

少女は嬉しそうに、その場で跳ねる。しかしニフェルには、さっ

ぱり意味が分からない。

「なぁ、何で僕が植物に詳しいって分かったんだ？」

「あー、あのな。あたしの目、普通の人は絶対桃色って言うんだよ。確かにそうっちゃそうだけど、正確にはあんたの言う通り桜色なんだ。でも桜って、珍しい花だから知らない人多いだろ？　だからみんな桃色って言うんだけど、それを言い当てれるってことは、ちょっとでも植物に詳しいってことだ！」

ニフェルの目の前で、少女は得意気にVサインをしてみせる。

確かに桜は珍しい花だ。稀有な存在で、その認知度は低い。

「なるほど……。それじゃあ君も、植物に詳しかったりするんだ？」

そこまで分析するには、多少なりとも知識が必要となる。少女はにんまりと笑った。

「まぁな！　あたし今ハイスクールの三年なんだけど、入学してからずっと薬草学を中心に勉強してきてっから」

ハイスクールの三年生といえば、確か十八歳のはずだ。ということは、この少女はニフェルと同い年になる。

（背小っちゃいから、僕よりも年下かと思ってた）

「そういうあんたの目も、変わってんな。藤色、初めて見た」

少女の言う通り、黒縁眼鏡の奥にあるニフェルの瞳は藤色だ。淡く青味がかった紫色の花を房状に垂れ下げて咲かせる藤は、桜と同

様に珍しい花である。
稀有で認知度が低い、藤という花の存在。それ故、今までは薄い紫だね程度で表されてきたニフェルの瞳だが、本来は淡く青味がかった紫、藤色だ。

「藤色って言い当てられたのは初めてだ。やっぱり、君も植物に詳しいんだな」

「まぁ一応、なっ！」

少女は再び得意気な顔をすると、ニフェルの髪を指差した。

「ついでに言えばその紫っぽい暗い赤の髪、葡萄色だろ？」

少女が指差す自分の髪を一房摘まみ上げ、ニフェルはにっと口角を左右に引く。

「正解！　そういう君の柔らかいブラウンの髪は、胡桃色？」

「そっ！　さすが、調合師なだけあるな！」

少女は笑みを浮かべて、ショートカットの髪をニフェルと同じように摘まみ上げた。
その時、ニフェルは少女の手の甲に擦り傷があるのに気付く。

「あ……」

「いやーそれにしても、植物の話しでここまで盛り上がれたのってあんたが初めてかも！　そういやあんた見ない顔だけど、新しく引っ越して来た人？」

「……その怪我」

「はっ？」

自分が問うたこととは全く関係のない返事に、少女は怪訝な表情を浮かべる。

「何言ってんだ、あんた？」

「手の、擦り傷」

「？　あ、本当だ。さっき転けた時に擦ったのかもなー。まぁ、こんなの唾付けときゃ治るだろ！」

あっけらかんと少女は笑い、荷物をよいしょと持ち直した。

「で、あんた引っ越してきた人？」

「僕はただの旅人だよ。それよりも君、あそこ座って」

少女の問いに素っ気なく答えると、ニフェルは道端にあるベンチを指差す。

「えっ、何で？」

「いいから！」

少女は首を傾げつつ、ニフェルの言う通りにベンチに腰かけた。

「なぁ、何すんの？」

「手の治療」

斜めがけにしていた大きなボストンバックをベンチに下ろすと、ニフェルはその中を漁る。

「治療って、こんなの放っときゃ治るだろ」

「僕が調合師っていうの聞いてた？　怪我があれば、それを薬で治療する。それが僕の仕事だ」

バックの中から茶色い皮袋を取り出すと、次はその中を漁りだした。

「いや、怪我つってもこんな擦り傷じゃんか」

「それでも怪我は怪我だ」

皮袋から透明な液体が入った大きめの瓶と、乳白色のクリームが入った小振りな瓶を出す。

ニフェルは大きい方の瓶の栓を開けると、中の液体を少女の手の甲にぶっかけた。

「うわっ、冷たっ！　それ何！？」

「消毒液」

「じゃあそっちは？」

「擦り傷を治すクリーム」

小振りな方の瓶を開けると、ニフェルは中身のクリームを少量指で掬う。そして反対の手で少女の手を取ると、傷口にそれを丁寧に塗り込み始めた。

「ふぅん……。ていうか、あんた本当に旅人？」

「うん、そうだけど」

「何か、旅人っぽくねぇな」

「そう？」

ちょこっと首を傾げつつ、クリームを塗り終えたニフェルはどこからか絆創膏を取り出す。

「何か……ぽくない」

「そう言われても、旅人は旅人さ。……はい、終了！」

絆創膏のガーゼが傷に当たるように貼ると、ニフェルは絆創膏をペシンと軽く叩いた。

「それで明日には治るから」

中腰で治療をしていたニフェルは立ち上がり、うーんと伸びをする。少女はといえば、絆創膏の貼られた手の甲をじっと見ていた。

「……あんた、名前は？」

「ん？　ニフェル。ニフェル・トランバー」

治療に出した道具をボストンバックに仕舞いながら、さらりと自分の名を言う。だからニフェルは、少女が瞠目したのに気が付かなかった。

「ニ……フェル……？」

「うん、そう。僕はニフェル」

「……ありがとう」

突然述べられた礼を不思議に思い、ニフェルは顔を上げ少女を見る。少女は微笑んでいた。

「治療ありがとう、ニフェル」

柔らかな声でもう一度礼を言い、少女はふんわりと儚げに、ただ微笑む。

「！」

その微笑む姿を見たニフェルは、驚愕し目を見張った。

（……今、この子があいつと、被って見えた……）

“ニフェル、ありがとう！”

そう言って微笑む、記憶の中の幼き少女。いつもふんわりと笑っ

ていた少女の姿と声が脳裏に浮かんだ。しかしそれは、すぐに消える。

（まさか、な。思い込みは駄目だ）

ニフェルは瞳を、ぎゅっと強く閉じる。ニフェルが瞠目したのに気が付かなかったのか、少女は会話を再開した。

「あたしさー、貸し借りとか嫌いなんだよ」

目を開け、普通の声で話す少女を見る。その姿に、幼馴染みの面影はない。

（ずっと探してるから、女の子にはあいつと似た所を無意識に探してしまうんだな）

先程、少女のふんわりと笑った顔が幼馴染みと被ったのは、自分が彼女をあまりにも切望しているからなのだろう。

ニフェルは一人頷くと、少女の話へと耳を傾けた。

「だから治療してもらったお礼に、何かこの街について聞きたいこととかあったら教えてやるよ。何かある？」

「んー、そうだなぁ……」

街について聞きたいこととといえば、ニフェルにとっては一つしかない。

「美味しいシフォンケーキを売ってる店、教えてくれよ」

幼馴染みがあの別れの日、餞別で焼いてくれたオレンジシフォンケーキ。あれには独特の風味があった。少女の父が焼いたシフォンケーキも食べたことあるが、それにはない、ほんわかとした風味。

その風味がするシフォンケーキを作れるのは彼女だけだと、ニフェルは思っている。だからシフォンケーキを食べれば、それが彼女が作ったかどうか分かるから、ニフェルは街毎にシフォンケーキを食べ歩いていた。

「シフォンの店か……。んー、美味しいかどうかは知らねぇけど、シフォンを売ってるとこなら近所に一つある」

「じゃあそこに、連れて行ってくれないか？」

ボストンバックを先程の用に斜めがけにすると、ニフェルは頭を下げる。

「いいよ。連れて行ってやる」

少女はベンチから立ち上がると、ついて来いと言わんばかりに颯爽と歩き出した。

その後をついていくと、少女から微かにココアの香りがした。

1日目―？

「……なぁ」

「何だよ」

「何でさっきから、路地裏？」

少女に付いて歩くこと五分。先程からひたすらに、建物と建物の間の路地裏を通っている。

（女の子が普通、こんな所歩く？）

ニフェルがそう思うのも、至極当然である。

路地裏はじめじめと薄暗く、空き缶が落ちていたり変な虫がいたり。はっきり言わなくても不気味で、何か出ても可笑しくない雰囲気がそこらに漂っている。普通の女の子なら怖がり、避けるべき道だ。

「だって近道だから」

……どうやらこの少女、ボーイッシュなのは口調と服装だけではなく性格もらしい。今まで三つの街に行ったニフェルだが、ここまで男勝りな女の子に出会うのは初めてだ。

（何かこの子、すごいな……）

勇ましく前を歩く小柄な少女の背中を見ていたニフェルは、ふと鼻に甘い匂いを感じた。先程も匂った、ココアの香りである。

「……なぁ」

「今度は何だよ」

「君から、ココアの匂いがする」

「はっ！？」

少女は立ち止まり、ニフェルを振り返った。何やら怪訝な表情をしている。

「や、変な意味じゃないんだけど。君の後ろ歩いてるから、その残り香っていうか……。ふわって、甘い匂いが香るんだよ」

「……あたしハイスクールが終わって帰るとこだったんだけど、スクールを出る前にココア飲んだから、それだろ」

素っ気なく言うと、少女はさくさくと歩を進め始める。ニフェルはそれに遅れないよう、早歩きで付いて行った。

「ここだ」

路地裏を抜け、人の疎らなストリートを歩いていた少女がピタリと止まった。そして指差す先には、一軒の小綺麗な家。

「ここが、シフォンケーキのお店……？」

「で、あたしん家」

そよ風のようにさらりと言うと、少女は芝生や花の植えられた小さな庭を歩いて行く。ニフェルは花や芝生を踏まないように気を付けながら、わたわたと少女の背中を追った。

「えっ、君ん家！？」

「そう。姉ちゃーん」

最初は気が付かなかったが、玄関から数メートル左にある窓が開いている。その中からは、杏子色の髪を持つ妖艶な美女が手を振っていた。

「お帰りー。あらぁ、友達？」

「まぁな。ニフェル、あたしの姉ちゃんだ。姉ちゃん、ニフェルだ」

「よろしくねぇ、ニフェル君っ」

にこぉと人懐っこそうな笑みを浮かべる美女もとい少女の姉。ニフェルはまたもわたわたとしながら、頭を下げた。

「よ……よろしくお願いしますっ！」

「ふふ、ニフェル君は可愛いわねぇ。お姉ちゃん、食べちゃいそう」

ペロリと舌で唇を舐めるその姿は、ザ・妖艶だ。慣れない大人の女性の仕草に、ニフェルは思わず赤くなる。

「姉ちゃん、誰でもかんでも口説くなよ」

「あら失礼ね。ワタシは口説いてるんじゃなくて、ニフェル君とちょっとでも仲良くなりたいなーって思っただけよ？」

うふ、と笑っている姉に、少女は大袈裟にため息を吐く。

「それが口説いてるっつーの……。あ、それよりも姉ちゃん、ニフェルがシフォン買いたいんだってさ」

「あら、お客さんだったのぉ？　それならそうと早く言ってくれなくっちゃ」

姉はいそいそと部屋の中に引っ込むと、間を置かずに茶色の紙袋を抱えて再び窓から顔を覗かせた。

「はい、どうぞ。本日のお菓子、ココアシフォンなり～」

「……あの、オレンジシフォンはないんですか？」

紙袋を渡されたニフェルは、少々困ったように問う。彼が食べたいのは、あの日幼馴染みが作ったのと同じ味のシフォンケーキである。

「あー、ごめんねぇ。今日はココアシフォンなんだぁ」

「今日は？」

姉の言葉に、ニフェルは僅かに頭を傾げた。

「ここはねー、お菓子は日替わりで味は週替わりなのよぉ。今日は、第一週目のココアと一日目のシフォンで、ココアシフォンなの。ご理解頂けたかしら？」

「えーっと、要するにここは、毎日お菓子が替わるということですか？」

「そういうことぉ」

この店のシステムをとりあえず理解したニフェルは、シフォンケーキの金を払って紙袋の中を覗いた。茶色のシフォンケーキが、芳醇なココアの香りを放っている。

ニフェルは手を突っ込んでシフォンケーキを千切ると、口に運んだ。

「えっ、ここで食うのかよ！？」

少女が何か言っている。しかしニフェルは、口の中のシフォンケーキに意識を注いでるため聞いちゃいない。

……ココアの芳醇な香りと甘みと、ふんわりとした口触り。そして何より、ほんわかとした独特な風味。

（似てる……！）

あの日食べた、独特な風味がする少女のオレンジシフォンケーキ。このココアシフォンは味こそ違うが、少女の作る独特な風味と大変酷似している。

ニフェルは目を見張り、姉に勢いよく尋ねた。

「これ、誰が作ったんですかお姉さん！？」
「ワタシ、お姉さんじゃなくてリプよぉ」
リプはニフェルを焦らすように、妖艶な笑みを浮かべる。
「えっと、リプさん！　誰が作ったんですか！？」
「うーん、残念ながら教えられないのよねぇ」
「どうして！？」
「本人の希望により、よ。誰にも言うなって言われてからぁ」
名前が聞けなければ、このシフォンを幼馴染みが作ったのかどうか、はっきりと分からないではないか。ニフェルは思わず地団駄を踏んだ。
「あ、じゃあ！　ここには、オレンジシフォンは並びますか！？」
オレンジシフォンを食べれば、幼馴染みかどうかはっきりと分かるはずだ。
「それも、答えられないわ。日替わりのお菓子、知っちゃったらつまらないでしょう？」
「そこを何とか……」
「ダ・メ・よ。オレンジシフォンが食べたいのなら、毎日いらっしゃい、ニフェル君」

「そんな……」

見た目にそぐわず意外と頑固なリプに、ニフェルは思わず溜め息を吐く。

「なぁニフェル。お前、何でそんなにオレンジシフォンに拘ってんの？」

「……幼馴染みを探してるんだ」

ニフェルは手の紙袋を弄びながら、ポツリと少女の問いに答えた。

「幼馴染み？」

「そう。僕が十才の時に引っ越しちゃったんだけどね。で、引っ越す当日に大きくなったらまた会おうって約束したんだけど、僕馬鹿であいつがどこに行くのか聞くの忘れちゃってて」

本当にあの頃の自分は馬鹿だと、つくづく思う。

「だから、旅して探してるんだ」

「ふぅん……。それで、何でオレンジシフォン？」

「あいつのシフォンケーキを、最後の日に食べたんだ。凄い美味しくて、何だか独特な風味があった。それが――」

「それが、オレンジシフォンだったと」

少女は先が読めたのか、ニフェルの言葉に被せて言った。彼はこくりと、少女の言葉に頷く。

「なるほどなー。ってか、引っ越し先聞かないって馬鹿だろ」

ぐさり。

「ん？　何か今、ぐさって刺さる音がどっかから……」

「……君の言葉が、僕の心にね」

「はっ、何言ってんのニフェル？」

「別になーんにも？　僕はどーせ馬鹿だしっ！」

ふい、とそっぽを向けば、少女は不思議そうに首を傾げる。

「変な奴。っていうか、その子の名前覚えてねぇの？」

「苗字はさすがに覚えてないけど、名前は覚えてるよ」

「じゃあシフォンじゃなくて名前で探せば？　そのほうが絶対効率いいと思うけど」

「うん。でもそれはしない」

一番効率が良いとされる方法を、ニフェルは一蹴した。

「何で？」

「んー、僕の意地？　その街にいるって分かれば名前出してでも探すけど、いるかどうか分かんないし。それに、信じてるから」

何を、と少女は問う。

「あいつが、シフォンケーキを作ってることを」

だから自分は、美味しいシフォンケーキを探すのだ。ニフェルは心の中でそう唱える。

「……お二人さん」

「何だよ、姉ちゃん」

「あのさ、商売の邪魔なんだよねぇ？」

にっこりと笑みを浮かべて、リプはニフェル達の背後を指差す。何かあるのかと後ろを振り返ると、お客と思われる数人が列を作って並んでいた。

「あ……」

「だから話すなら、公園にでも行って来てくれるかなぁ？」

笑っているリプが怖い。ニフェルは今すぐにでも立ち去りたかったが、公園がどこにあるのか分からないから動けなかった。

（ん？　そもそも、これ以上この子と話すことある？）

お礼だったシフォンケーキ屋への案内はもう済み、特にこの少女

に用はない。公園に行く必要はないではないか。

（そうだ。それに日が暮れるまで宿を探さないといけないし）

何せこの街は広い。まだ昼過ぎだが、早く探すに越したことはないだろう。

「あの――」

「姉ちゃん、まだ大丈夫か？」

見事なスルー。別に公園に行く必要はないと告げようとしたニフェルの言葉を、少女はそれはもう華麗にスルーをした―（単に聞こえていないだけだが）。

「あぁー……うん、まだ大丈夫よぉ。足りなくなったら携帯で呼ぶからねーぇ？」

「分かった。――よし、ニフェル。行くぞ！」

少女は毅然と言い放つと、踵を返して歩き始めた。ニフェルの言葉を聞く気は、更々ないようである。

「はいニフェル君も、行ってらっしゃぁい」

追い討ちをかけるように、リプがニフェルに手を振る。こうなったら、公園まで行くしかないではないか。

（……まぁ、いいか。遅くなったらあの子に宿を教えてもらえばいいし）

ニフェルは観念し、リプに頭を下げて少女の後を追う。
背後から、リプの甘ったるい接客の声が聞こえてきた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9059x/

ふんわりドルチェ

2011年12月1日23時54分発行